

CAS	107062
物質名	1,2 - ジクロロエタン
IARC Vol. (発行年)	71 (1999年)
遺伝子傷害性に関する知見	<ul style="list-style-type: none"> ・ in vitro 試験系では、細菌、ショウジョウバエ、哺乳類の培養細胞を用いた試験で遺伝子突然変異を誘発した。 ・ in vivo 試験系では、肝細胞で DNA 傷害を誘発し、げっ歯類で DNA、RNA 及びタンパク質と結合した。
実験動物に関する知見	<p>評価：十分な証拠</p> <p>概要：マウス、ラットへの経口投与の結果、マウスでは雌雄で肺の悪性腫瘍及び悪性のリンパ腫を、雄で肝細胞がんを、雌で乳房と子宮の腺がんを認めた。ラットの雌雄では血管肉腫を、雄では前胃のがんを、雌では乳房の良性及び悪性の腫瘍を認めた。</p> <p>マウス、ラットに吸入暴露させた結果、肝臓、肺、乳腺を含む複数の臓器で腫瘍の発生数増加を認めた。</p>
ヒトに関する知見	<p>評価：不十分な証拠</p> <p>概要：本物質の暴露を受けた労働者を対象としたコホート調査が5つ、コホート内ケースコントロール研究が1つある。リンパ系及び造血系のがんは3調査で、胃がんは1調査で、膵臓がんも1調査で認められたが、調査対象者が複数の化学物質に暴露されていたので、本物質に直接関連する発がんリスクは不明であった。脳腫瘍についても1コホート調査及びコホート内ケースコントロール研究で暴露との関係が検討されたが、有意な関係は認められなかった。</p>
評価結果	上記のとおり、本物質は細菌を用いる試験をはじめとする複数の試験系で遺伝子傷害性が認められているため、より詳細な情報収集を行う必要があると考えられた。